

ヨハネの黙示録

～解釈に基づく台本起こし～

2014/6/18

Ver. 1.3

作者：Yoshie N

黙示録解釈の更新情報 <http://secca.ninpou.jp/>
このコンテンツについて <http://secca.ninpou.jp/script.html>

「ヨハネの黙示録～解釈に基づく台本起こし～」・登場キャラ表

最初に語り始めた者	最初に現れた御使い（副ナレーター）
ヨハネ	ある時、啓示を受け黙示録を記す ナレーター
御座にいます方	全知全能の神
四つの生き物	「獅子のよう」・「雄牛のよう」・「人のような顔をした生き物」・「鷲のよう」 想像上の生物
二十四人の長老	
小羊	七匹の小さな羊 獣に対して小さな羊
白い馬に乗って登場した者	正しい者
赤い馬に乗って登場	邪悪な者（赤い龍）
黒い馬に乗って登場	（怪獣）
青白い馬に乗って登場	（怪獣）
避難民達	皆、白い衣装を身に着ける
御使い達	キリストの使い達 七人以上～
「生ける神の印」を押された十四万四千人	（舞台演技では十二人以上～）
ミカエルとその御使い達	天国での言論による戦いにおけるトップとその仲間
太陽を着る女	日章旗か旭日旗のデザインの衣装で、月と入れ替わりで登場
赤い龍、龍	七つの頭と十の角を持つ赤い龍
獣（けもの）	「七つの頭と十の角を持つ怪獣」と「小羊のような角を持つ怪獣」 小羊に対して獣
大淫婦	三人の真犯人
大きな白い御座にいます方	千年後の審判長

序幕

1. パトモス島・時刻不詳・洞窟

(第一章)

時代背景：およそ二千年前の古代ローマ時代。

パトモス島。（※エーゲ海にあるパトモス島に、ヨハネが流刑されていたという説）

ヨハネ (M) 「これは、イエスキリストの黙示である。この黙示は、神にとってすぐにも起こるであろうことを、僕（しもべ）たちに伝えるため、キリストに与え、そして、キリストが御使いを遣わして、彼の弟子であるヨハネに伝えたものである。私、ヨハネは、神の言葉とイエスキリストの証明、すなわち、私が見たすべてのことをここに明かす。この預言の言葉を朗読する者と、これを聞いて、書かれていることを守る者達は、幸いである。”その時”が近づいているからである。

ヨハネから、アジアにある七つの教会へ。

（テロップ：アジア＝当時は、漠然と東の方の地を指した）

（祈り）今いまし、昔いまし、やがてきたるべき方から、また主の御座の前にある七つの灯火から、また忠実な証人、死人の中から最初に生まれた者、地上のすべての王の支配者であるイエスキリストから、恵みと平安が、あなた方にありますように。私達を愛し、その血によって私達を罪から解放し、私達をその父なる神のために、御国（みくに）の民とし、祭司として下さった方に、代々限りなく栄光と権力がありますように、アーメン。見よ、彼は雲に乗って来られる。すべての人、ことに、彼を刺し通した者達は、彼を仰ぎ見るであろう。また地上のすべての民は、彼の犠牲ゆえに胸を打って嘆くであろう。” おおっ”（等の感嘆符）・・・！（十字を切って）アーメン。（祈り終わり）」

ヨハネ、羊皮紙に書き始める。

ヨ (M) 「今いまし、昔いまし、やがて来るべき者、全能者にして主なる神が仰せになる、」

ある日、ヨハネに不思議な存在が語りかけた。

最初に語り始めた者 「私はアルパであり、オメガである。」

ヨ (M) 「あなた方の兄弟であり、共に御国が来たらんことを祈りつつ、苦難と忍耐に預かっている——私、ヨハネは、神の言葉とイエスの信仰のため、パトモスという島にいた。ある日、主が望まれた日に、我は御霊（みたま）に感じ、啓示を受けた。そして、私の後ろの方で、ラッパのような大きな音がするのを聞いた。その声はこう言った、」

最初 「あなたが見たことを、書きものにして、それをエペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、ヒラデルヒヤ、ラオデキヤにある七つの教会に送rinaさい。」

と、大水のように轟く声で呼びかけられ、ヨハネ振り向く。七つの金の燭台があり、その間に最初がいる。

最初：足まで垂れたローブを着て、胸に金の帯を締めた人のようなもの。衣装はローマ時代の神のデザイン。全身が光り輝いていて、髪の毛は真っ白で（白いのは、その色彩が人間には視認できないため）、目は燃える火のように輝く。足も真鍮のような黄銅色？に光り輝く。右手に七つの星を持ち、口からは諸刃の剣（つるぎ）のように鋭い言葉が紡がれる（CG表現？）。顔も太陽のように照り輝く。（※人の姿をしたエネルギーの塊のような存在）

ヨハネ、気絶する。

最初が、ヨハネの肩に右手を置いて言う。

最初 「恐れることはない。私は、初めであり、終わりであり、また、生きている者だ。私はあなた方のように死んだことはあるが、見よ、世々限りなく生きている者である。そして、死者と黄泉の国

に関する鍵を持っている。あなたが見たこと、現在のこと、これから起ころうとすることを、書き留めなさい。あなたが私の右手に見た七つの星と、私の周りの七つの燭台が意味するものはこうである。七つの星は七つの教会にいる御使いのこと、七つの燭台は七つの教会である。」

2.

この世・外

(※全貌が分かった後で意味が分かる部分)

(第二章)

(※イメージ映像でもいい)

最初 「エペソにある教会の御使いに、こう書き送りにさい。」

七つの星のうち、一つがエペソに向かう。

(※教会： 宗教施設、集会所、人の集まり、等々)

最初 「右手に七つの星を持ち、七つの金の燭台を歩く者が次のように言われる。—————」

エペソの御使い 「—————私はあなたの技と労苦と忍耐を知っている。また、あなたが悪い者達を放置せず、使徒を装っている者達を試し、偽物であることを見抜いたことも知っている。あなたは忍耐をし続け、私の名のために忍び通して弱り果てることがなかった。しかし、責めることがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。そこで、あなたがどこから落ちたかを思い起こし、悔い改めて初めの技を行いなさい。もし、そうしないならば、私はあなたのところに来て、あなたの燭台をその場から取り除けよう。しかし、こういうことはある。あなたはニコライ宗（テロップ：ニコライ宗＝無道徳的な宗派、カルト教団）の技を憎んでおり、私もそれを憎んでいる。—————耳のある者は御霊が諸教会に言うことを聞くがよい。勝利を得て天に招かれる者は、神の楽園にある命の木の実を食べることが許される。」 (※ここで流れる映像は、人によって異なる。が、おそらく、ユダヤ教の人々。)

最初 「スミルナにある教会の御使いに、こう書き送りにさい。」

六つの星のうち一つがスミルナへ。

スミルナの御使い 「初めであり、終わりである者、死んだことはあるが生き返った者が、次のように言われる。私は、あなたの苦難や貧しさを知っている。（しかし、実際には、富んでいるのだ。）また、ユダヤ人と偽ってサタンの会堂に属する者達に誘われていることも私は知っている。あなたの受けようとする苦しみを恐れてはならない。見よ、悪魔があなた方のうちのある者を試すため、獄に入れようとしている。あなた方は十日の間（テロップ：十日の間など、期間は神の国の時間感覚）、苦難に遭うであろう。死に至るまで忠実であれ。そうすれば、命の冠を与えよう。——耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい。勝利を得て天に招かれる者は、火の池の獄で滅ぼされることはない。」（※ここで流れる映像は、人によって異なる。が、おそらく、迫害された人々。アジアの少数民族や、無実なのに見せしめのように獄に入れられた人がある諸国。）

最初 「ペルガモにある教会の御使いに、こう書き送りなさい。」

五つの星のうち一つがペルガモへ。

ペルガモの御使い 「諸刃の剣のように鋭い言葉を持つ方が、次のように言われる。私はあなたの住んでいる所を知っている。そこにはサタンの座がある。あなたは、私の名を堅く持ち続け、私の忠実な証人アンテパスがそこで殺された時でさえ、私に対する信仰を捨てなかった。しかし、責めるべきことが少しある。あなた方の中には、現にバラムの教を奉じている者がいる。バラムはバラクに教え込んでそそのかし、イスラエルの子らの前に、つまずきになるものを置かせて、偶像に捧げたものを受け入れさせ、また様々な不品行をさせたのである。それと同じように、あなた方の中には、ニコライ宗の教えを奉じている者もいる。だから、その者達は、悔い改めなさい。そうしないと、私はあなたの所に行き、私の鋭い言葉の剣をもって彼らと戦うことになるだろう。——耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい。勝利を得て天に招かれる者には、隠されているマナを与えよう。また、白い石を与えよう。この石の上には、これを受ける者しか知らない新しい名

が書いてある。」（※ここで流れる映像は、人によって異なる。マナ・白い石はおそらく宗教的なものなので、それが何か分かる宗教文化圏の人々。）

最初

「テラテアにある教会の御使いに、こう書き送りなさい。」

四つの星のうち一つがテラテアへ。

テラテアの御使い 「燃える炎のような輝く目と、光り輝く真鍮のような足を持った神の子が、次のように言われる。私は、あなたの技と、愛と信仰と奉仕と忍耐を知っている。しかし、あなたに責めることがある。あなたは、あの真犯人をなすがままにさせている。この都（アメリカ金融界、ウォール街？）、イゼベルという女は、女預言者（※神の言葉を伝える選ばれた者）と自称し、私の僕（しもべ）達に教え込み惑わして、不品行をさせ、偶像に捧げた教えを受け入れさせている。私は、この都に悔い改める機会を与えたが、悔い改めてその不品行をやめることをしない。見よ、私はこの都を病の床に投げ入れる。この都と姦淫する者をも、悔い改めてあの都の技から離れなければ、大きな艱難の中に投げ入れる。また、この都の”子”といえる都をも打ち殺そう。こうしてすべての教会は、私が人の心の奥底まで探り知ると悟るであろう。そして私は、あなた方一人一人の技に応じて報いよう。また、テラテラにいる他の人達で、まだあの都の教えを受けておらず、サタンの所謂”深み”を知らないあなた方に言う。私は別に他の重荷をあなた方に負わせることはしない。ただ、私が来るときまで、自分の持っているものを堅く保持していなさい。勝利を得て天に招かれる者、私の技を最後まで持ち続ける者には、諸国の民を支配する権威を授ける。彼らはまるで鉄の杖を持って土の器を砕くように、既に役に立たなくなっている旧来のものを新しくし、諸国の民を治めるであろう。それは私自身が父である神から権威を受けて治めるも同様である。私はまた、彼に明けの明星を与える。——耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい。」

（※ここで流れる映像は、金融危機のことで、諸国の政治家・統治者達に向けた内容。）

（第三章）

(※第二章と同じく、イメージ映像でも)

最初 「サルデスにある教会の御使いに、こう書き送りなさい。」

三つの星の一つがサルデスへ。

サルデスの御使い 「神の七つの霊と七つの星とを持つ方が次のように言われる。

私はあなたの技を知っている。あなたは、生きているというのは名ばかりで、“生ける屍”である。目を醒まし、洗脳されかけている残りの者達を力づけなさい。私はあなたの洗脳の技が、私の神の御前に完全であるとは見ていない。だから、あなたがどのようにして支配を受けたか、また悪魔の誘いを聞いたかを思い起こして、良き昔の事を守り通し、そして、悔い改めなさい。もし洗脳が解けていないなら、あなたにとって、わたしは盗人のように来るだろう。どんな時にあなたのところに来るか、あなたには決して分からない。しかし、サルデスには洗脳されていない人が、数人いる。彼らは白い衣を着て、私と共に歩み続けるであろう。彼らは、それにふさわしい者である。勝利を得て天に招かれる者は、このように白い衣を着せられるのだ。私はその名を命の書から消すようなことを決してしない。また、私の父である神と御使い達の前で、その名を言おう。——耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい。」 (※ここで流れる映像は、カルト集団や国家によってほとんどの人が洗脳されてしまった地域。北朝鮮や中国の地域だけではなく、先進諸国でも小規模ながらあり得る。) (例：日本の小学校でも実際にあった。カルト関係者の担任に支配された教室、等。)

最初 「ヒラデルヒヤにある教会の使徒に、こう書き送りなさい。」

二つの星の一つがヒラデルヒヤへ。

(※他の星と異なり、「御使い」ではなく「使徒」)

ヒラデルヒヤの使徒 「聖なる者、誠なる者、ダビデの鍵を持つ者、開けば誰も閉じられることがなく、閉じれば誰にも開かれることのない者が、次のように言われる。私は、あなたの技を知っている。見よ、私はあなたの前に誰も閉じることのできない門を開いておいた。なぜなら、あなたには少ししか力がなかったにも関わらず、

私の言葉を守り、私の名を否まなかったからである。見よ、サタンの会堂に属する者、すなわちユダヤ人と偽る者達に、こうしよう。見よ、彼らがあなたの足下に来て平伏するようにし、そして、私があなを愛していることを、彼らに知らせよう。忍耐についての私の言葉をあなたが守ったから、私も、地上に住む者達を試すために、全世界に臨もうとしている試練の時に、あなたを防ぎ守ろう。私は、すぐに来る。あなたの冠が誰にも奪われないように、自分の持っているものを堅く守っていなさい。勝利を得て天に招かれる者を、私の神の国の重鎮としよう。彼は決して二度と外へ出ることはない。そして彼の上に、私の神の御名と、私の神の都、すなわち天と神の御元から下ってくる新しいエルサレムの名と、私の新しい名を書き付けよう。——耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい。」（※ここで流れる映像は、あとで「小羊」にキャラ化される七人または複数の人物に向けた内容。モーセやイエスキリスト級の人物か、またはその代理人。ここで使徒から励まされるべきは、今回の件に関連して、この世に来ていた人達であろう。）

最初 「ラオデキヤにある教会の御使いに、こう書き送りなさい。」

最後の一つの星が、ラオデキヤへ。

ラオデキヤの御使い 「アーメンたる者、忠実な、真（まこと）の証人、神に造られた者の根源である方が次のように言われる。私はあなたの技を知っている。あなたは冷たくもなく、熱くもない。むしろ、冷たいか熱いかであって欲しい。このように、熱くもなく、冷たくもなく、生ぬるいので、あなたを口から吐き出そう。あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、何の不自由もないと言っているが、実はあなた自身こそ、惨めな者、憐れむべき者、貧しい者、目の見えない者、裸の者であることに気づいていない。そこであなたに勧める。天国で富む者となるために、私から火で洗練された金を買ひ、また、裸の恥を晒さないため身につけるように、白い衣を買ひなさい。また、見えるようになるため、目にぬる目薬を買ひなさい。すべての私が愛している者を、私は叱ったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって悔い改めなさい。

見よ、私は戸の外に立って、叩いている。誰でも私の声を聞いて戸を開けるなら、私はその中に入って彼と食を共にし、彼もまた私と食を共にするであろう。勝利を得て天に招かれる者には、私と共に私の座につかせよう。それはちょうど、私が勝利を得て私の父である神と共にその御座についたのと同様である。——耳のある者は、御霊が諸教会に言うことを聞くがよい。」（※ここは、コメディータッチ。富裕層の人々を、神が焦ってせっついてる感じ。冷たい人達でもない、かといって、自ら活発に行動して試練に遭うこともない。そんな彼らに対して、試練を与えかねて困っているシーン。）

参) 第二章と第三章は、自分や誰かがいる所がピンと来たら、そのシーンを入れたくなりませんか？ ここは、スタッフ達の想像力によって、流れる映像が異なってよいと思います☆

本編

(※↓適宜、副ナレーター（最初に語り始めた者、等）の台詞を入れるなど↓)

3. 聖所の舞台セット

(第四章)

ヨハネが見ていると、天に門が開く。

ヨハネ、目を見張る。

最初に語り始めた者 「ここに上ってきなさい。そうしたら、これから先、未来に起こるべきことを見せてあげよう。」

ヨハネの身に何らかの不思議現象が起こり、気づくと天の門を通っている。

ヨハネの視線の先には、天の舞台がある。

ヨハネ (M) 「見よ、天に御座があり、御座にいます方があった。」

聖所の舞台セットの様子：

御座にいます方（神）は、碧玉（青色）や赤瑪瑙（赤色）のように光に包まれる。御座の周りには、緑玉（緑色）のような虹が現れている。

御座の周りには、二十四人の長老が、白い衣を身にまとい、金の冠をかぶって、それぞれ席に座っている。

御座からは、稲妻と、諸々の声（SE:雷が轟く音？）と、雷鳴が発している。

七つの灯火（神の霊）が、御座の前で燃えている。

御座の前は、水晶に似たガラスの海のようなスクリーン（神の国の映像ディスプレイ）。

御座の側に近い周りには、四つの生き物がいて、（Z・Iズームイン）その体の一面に目がついている。（Z・0）

第一は獅子のよう、第二は雄牛のよう、第三は人のような顔をしており、第四は飛ぶ鷲のよう。四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、（Z・I）その翼のまわりも内側も目で満ちている。（Z・0）

四つの生き物 「（祈りまたは賛美歌）

聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、

全能者にして主（しゅ）なる神。

昔いまし、今いまし、やがてきたるべき者～～

（昼も夜もずっと絶え間なく叫び続ける）」。

賛美が続く中、二十四人の長老は、神の御前にひれ伏

し、拝し、彼らの冠を御座の前に投げ出して言った、

二十四人の長老 「われらの主なる神よ、

あなたこそは、

栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方。

あなたは万物を造られました。

御旨によって、万物は存在し、
また造られたのであります」。

(第五章)

御座の神の右手に巻物がある。巻物の裏にも表にも文字
が書いてあり、七つの封印で封じてある。

一人の強い御使いが大声で呼ばわっている。

強い御使い 「巻物の封印を解くのに、ふさわしい者は誰か、いないか!？」

しばらく呼ばわって回るが、天にも地にも地の下にも、
巻物を見ることができる者はどこにも一人もいない。

ヨハネ、激しく泣く。

やがて、長老の一人がヨハネに言う。

長老 「泣くな。見よ、ユダ族の獅子、ダビデの若枝である方が、勝利
を得て天に戻られた。その巻物を開き、七つの封印が解かれる時
が来た。」

ヨ (N) 「そこに、私は、小さな羊が立っているのを見た。」

御座と四つの生き物と、長老達の間、御座の前のスクリー
ンの所に、小さな羊が立っている。小羊は、ほふられて
(殺されて)、天に召されて来た所だと分かる。

小さな羊に、七つの角と七つの目が重なって見えた。

(※小羊が七匹、重なったように同じ場所、スクリー
ンの所に見えた。)

ヨ (N) 「彼らは、全世界に遣わされていた神の七つの霊魂であった。」

小羊は、進み出て、神の右手からその巻物を受け取る。

その時、四つの生き物と、二十四人の長老は、それぞれ
豎琴と、香が満ちた金の鉢を手に持ち、(歌う準備をし
て、) 小羊の前にひれ伏した。

香の煙は、祈りでできている。

M: 四つと長老達、『新しい歌』を歌う。

四つ・長老 「（一部が合唱して言う）あなたこそが、その巻物を受けとり、封印を解くにふさわしい方。あなたはほふられ、その血によって、神のために、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から人々をあがない、私達の神のために、彼らを御国の民とし、祭司となさいました。彼らは地上を支配するに至るでしょう。」

御使い達 聖所に、万の幾万倍千の幾千倍もの、たくさんの御使い達の声上がる。それは大声で叫んでいた。

御使い達 「（合唱）ほふられた小羊こそは、
力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、
賛美を受けるにふさわしい。」

御使い達 天と地、地の下と海の中にある（全世界の）すべての神に造られたもの、その中にあるすべてのものの言う声が聞こえる。

御使い達 （※つまり、万物の被造物が万物の創造主と、ほふられた小羊を賛美する。）

万物の被造物 「（合唱）御座にいます方と小羊とに、
賛美と、誉れと、栄光と、権力とが、
世々限りなくありますように。」

四つ 「・・・アーメン。」

長老達 はひれ伏して礼拝した。

参) ここで巻物を受け取った”ほふられた小羊”はイエス・キリストのことだが、「神の七つの霊魂として全世界に遣わされた小羊」は他にもいて、最初その七匹が重なって姿が見えたため、「七つの角と七つの目」があるように見えた。

◎「聖所の舞台セット」は、ここまで映ったセットに、「金の祭壇（第六章、第九章、第十一章、第十四章）」と「天の証しの幕屋の聖所（第十一章、第十五章）」が加わったもの。

4. 聖所の舞台セット と 地上（舞台セットか映像）

(第六章)

小羊が封印の一つを解く。ヨハネが見ていると、

四つのうちの一体 「（雷のような声で）きたれ！」

白い馬が出てくる。乗っている者は、弓を手に持っている。

冠を与えられる。

四つのうちの一体 「過去、幾度も勝利を得て天に招かれた者よ、再び勝利を手になせよ。」

勇んで（地上に）駆けて行く。

小羊が第二の封印を解く。

第二の生き物 「きたれ！」

赤い馬が出てくる。

第二 「人々を殺し合わせる者よ、地上から平和を奪い取ることを許さう。」

乗っている者は、大きな剣を与えられた。

小羊が第三の封印を解く。

第三の生き物 「きたれ！」

黒い馬が出てくる。乗っている者は、秤（はかり）を手に持っている。実は、正体は獣（怪獣）。

第三 「小麦一升は一デナリ。大麦三升も一デナリ。金融・経済を牛耳る者よ、食糧とエネルギー資源も損なうな。」

小羊が第四の封印を解く。

第四の生き物 「きたれ！」

青白い馬が出てくる。乗っている者の名、(テロップ：「死」)。実は、正体は獣(怪獣)

彼に、黄泉(死をもたらすようなもの)が従っていた。

第四 「黄泉を従える者よ、地上の四分の一を支配する権威と争いと飢饉、そして地上の獣らによって、人を殺す権威を与えよう。」

小羊が第五の封印を解く。

金の祭壇の下に、信仰と信仰の誓いを守ったために、殺された人々の霊魂がいた。

人々の霊魂(=避難民達) 「(大声で叫んで) 聖なる真(まこと)の主(しゅ)よ。あなた様はいつまで、裁く事をなさらず、また地に住む憎むべき者達に対して、私達の血の報復をなさらないのですか？」

するとたちまち、彼ら一人一人に白い衣が与えられた。

(テロップ：避難民達)

御座にいます方 「あなた方と同じく殺されようとする仲間や兄弟達の数が満ちるまで、もうしばらく休んでいるように。」

小羊が第六の封印を解く。

地上で大地震が起こる。

太陽は布に描いた絵画のように(毛色の粗布のように)黒くなり、月は全面血のように赤くなり、天の星は揺れて(イチジクのまだ青い実が大風に揺られて振り落とされるように)、地に落ちた(全部ではない)。

天は巻物が巻かれるように他の空間に消えて行き、すべての山と島がその場所から他の空間に移された。

地上の様々な身分の人々（権力者達、高官、千人隊長、金持ち、勇者、奴隷、自由人ら）が皆、洞穴や山の岩陰（シェルターでも）に身を隠した。

隠れた人々

「（自分が隠れている山や岩に向かって）さあ、我々を覆って、御座にいます方の御顔と小羊の怒りからかくまっておくれ。御怒りの大いなる日が、すでに来てしまったのだ。誰がその前に立ってられようか。」

（第七章）

ヨハネが見ると、地上の四隅に四人の御使いが立っていた。

地球上のチベット・東トルキスタン・内モンゴルの辺りを一角として、中国・朝鮮を囲む、四角い結界のようなもの。

四人は、その結界を張ることで、地の四方の風を引き止めて、地と海とすべての木に、風が吹きつかないようにしていた。

一人の御使いが、[生ける神の印]を持って、日の出の方向から昇ってきた。彼は、四人の御使いに向かって、

昇ってきた御使い 「（大声で叫んで）私達の神の僕らの額に、私達が印を押してしまうまで、地と海と木を害してはならない。」

参) 結界の一角が崩れ、チベット・東トルキスタン・内モンゴルが侵略されるが、なんとか結界の中に怪獣を閉じ込めている。

御使い達は、地上の人々のうち、選ばれた者の額に[神の印]（模様かテロップ）を押していった。

ヨ (N) 「私は印を押された者の数を聞いたが、イスラエルの子らのすべての部族のうち、印を押された者は十四万四千人であった。」

テロップ： ユダの部族のうち、一万二千人、
ルベンの部族のうち、一万二千人、
ガドの部族のうち、一万二千人、
アセルの部族のうち、一万二千人、
ナフタリの部族のうち、一万二千人、
マナセの部族のうち、一万二千人、
シメオンの部族のうち、一万二千人、
レビの部族のうち、一万二千人、
イサカルの部族のうち、一万二千人、
ゼブルンの部族のうち、一万二千人、
ヨセフの部族のうち、一万二千人、
ベニヤミンの部族のうち、一万二千人、
計 十四万四千人が印を押された。

聖所の舞台に、あらゆる国民、部族、民族、国語の中から数え切れないほど大勢の群衆がやってくる。白い衣を身につけ、シュロの枝を手に持っている。（←舞台に入り切れるだけの人数が舞台に上がる。十二人以上～）

彼らは、御座と小羊の前に立つ。

十四万四千人の代表 「救いは、御座にいます我らの神と小羊から来る。」

他の御使い達は皆、御座と長老達と四つの生き物の周りに立っていたが、御座の前にひれ伏し、拝して言った、

御使い達 「（祈り）アーメン、讃美、栄光、知恵、感謝、
誉れ、力、勢いが、世々限りなく、

我らの神にあるように、アーメン。」

長老達の一人が、ヨハネに語りかけた。

長老 「この白い衣を纏っている人々は、誰だ。どこから来たのだ。」

ヨ 「私の主よ！ それはあなたをご存知です。（祈りのポーズ）」

長老 「……。彼らは大きな患難を通過してきた人達で、その衣を小羊の血で洗い、白くしたのだ。それだから彼らは、神の御座の前におり、昼も夜もその聖所で神に仕えている。御座にいます方は、彼らの上に幕屋を張って共に住まわれるであろう。彼らは、もはや飢えることがなく、渇くこともない。太陽も炎暑も、彼らを侵すことはない。御座の正面にいます小羊は、彼らの牧者となって、命の水の泉に導いて下さるであろう。また神は、彼らの目から涙をことごとくぬぐいとして下さるであろう・・・

（話長い感じ）」

（第八章）

小羊が第七の封印を解いた。

・・・が、その後30分ほど、天の舞台は静かだった。

（※俳優達が演技の段取りを練り合わせているため☆普通に考えれば、幕間の休憩だが、休憩の合図はなかった様子・・・。）

x x x

そして、ヨハネが見ていると、

神の御前に、七人の御使いが立っていた。

七つのラッパが彼らに与えられた。（※ラッパは、映像のシーンが次の事件に切り替わったことを、ヨハネに示すためのもの。）

さらに別の御使いが出てきて、金の香炉を手に持って、祭壇の前に立った。

そのたくさんの香は、御座の前の金の祭壇の上に捧げられた。

香の煙は、人々の信仰の祈りと共に、神の御前に立ち昇った。

御使いはその香炉を取り、それに祭壇の火を満たし、スクリーンの前の床に投げつけた。

スクリーン、スイッチオン！ 多くの雷鳴と、諸々の声（雷の轟き）と、稲妻と、地震が起こった（SE：ピカッ、ゴロゴロ・・・ドオオオ、ピシャーン！カカーッ、ゴゴゴゴゴ・・・ といった感じの音響）。

5. 舞台演技（ラッパ） と スクリーンに映し出される映像

七人の御使いが、それぞれのラッパを吹く用意をした。

第一の御使いがラッパを吹き鳴らした。

スクリーンに、赤く燃える鉛玉と火が地上に降り、地上を広範囲（その映像上で見渡す範囲の三分の一）焼く映像が流れる。（※つまり、火を噴く兵器で砲弾が雨霰のように降りかかって、大きな森林火災が起る映像。）

第二がラッパを吹き鳴らした。

燃え盛る石油タンカーが海で転覆するシーン。海の広範囲（その映像上で見渡す範囲の三分の一）が赤くなって汚染され、そこにいた海中の生物は死に、多くの船も立ち往生する（壊される？）。

第三がラッパを吹き鳴らした。

松明のように燃えている大きな流星のようなものが、宇宙空間を背景に接近してくるシーン。（※この流星は

その後、核爆発を起こしたが、衝撃シーンはカットされている。)

川と水源のシーン。(地名のテロップ: チェルノブイリ) 原発事故が起こり、川の広範囲(その映像上で見渡す範囲の三分の一)と水源が汚染され、(水が苦よぎのように)苦くなった。(テロップ: 一九八六年四月二十六日 チェルノブイリ原発事故) そのため多くの人々が死んだ。(※注 この流星と原子力の原理が関連している事を示したシーンで、星が原発に衝突したのではない。)

第四がラッパを吹き鳴らした。

都市と空の一日のシーン。夜の太陽と月と星が、映像上で三分の一が打たれて(映像上揺れて?)、それらの天体は暗くなった。昼の三分の一は明るくなった。夜も三分の一は明るくなった。(←つまり、経済発展する国が増えた)

(↑※預言の未来が、近現代であることを示すシーン)

一羽の鷺が中空を飛び、大きな声で言った。

鷺

「ああ、災いだ、災いだ、地上に住む人々には、災いだ。尚、三人の御使いが、ラッパを吹き鳴らそうとしている。」

(第九章)

第五の御使いがラッパを吹き鳴らした。

映像で、宇宙空間を背景に、一つの彗星のようなものが上から下へ飛んでいくシーン。

ヨ (N)

「この彗星に、地獄の穴を開く鍵が与えられた。」

あの世の天国と地獄の境目に穴がある。

彗星は躍動的に飛んで行く・・・！（※彗星はこの後、太古エネルギー宇宙で、暗黒星雲に体当たりしたのだが、衝撃シーンはカットされている。）

そして、地獄の穴が開かれた。穴から暗い煙が大きな炉の煙のように立ち昇り、太陽も空気も暗くなった。煙の中から、暗い色のイナゴのようなものが出てきて、サソリのような力を持っていた。

ヨ (N) 「地獄から立ち上った暗い煙の中から、イナゴのようなものが出てきた。それはサソリのような苦痛を与える力を持っていた。彼らは、地の草やすべての青草、それから木をそこなってはならないが、額に神の印がない人達は害を加えてもよいと言い渡された。」

額に[神の印]（模様かテロップ）がない人達に、暗いイナゴのようなものの集団が襲いかかる。（※この[神の印]は、あの世にいる避難民に付くもの。）

ヨ (N) 「彼らは、人間を殺さずに、“五ヶ月の間”、苦しめることになっていた。彼らの与える苦痛は、サソリに刺されたような苦痛であった。」

襲われた人々は、徐々に身体が暗く変色し、身体の形が崩れていく（浸食されて行く）。

（テロップ：“五ヶ月後”）

ヨ (N) 「その時には、人々は死を求めても死を与えられず、自ら死を望んでも死は逃げて行くのだ。」

この人々が、死にたくても死ねない様子。

（テロップ、消える）

中世の戦争のシーン。甲冑を全身に纏った兵士や、攻城兵器の様子。動物の毛等で飾った甲冑を身につけた兵士達の姿。（SE：攻城兵器が戦場に急ぐ音）攻城兵器の、砲丸を遠くに飛ばす長い部分が引かれる。

そのシーンと、暗いイナゴのようなものの集団がサソリのような力を使うシーンが重なる。

(※暗い煙と暗いイナゴのようなものの集団が、中世の暗黒時代に悪影響を与えたということ。)

ヨ (N) 「その尾 (“攻城兵器の砲丸を遠くに飛ばす部分” と、“暗いイナゴのようなもののサソリのような尾”) には、“五ヶ月の間”、人間を害する力がある。彼らは地獄に集まった仲間達を王に頂いており、その名をヘブル語でアバドンと言い、ギリシャ語ではアポロンと言う。(テロップ：暗黒星雲)」

ヨ (N) 「**第一の災いは過ぎ去った。** (←テロップなどでこの文を強調) 見よ、この後、なお二つの災いが来る。」

第六の御使いがラッパを吹き鳴らした。

神の御前にある金の祭壇に四つの角型のスピーカーが付いているが、そこから出た声、

声 「大ユウフラテ川のほとりに繋がれている四人の御使いを解いてやれ。」

ヨ (N) 「すると、その時、その日、その月、その年に用意されてきた四人の御使いが、人間の三分の一を殺すために解き放たれた。」

SE: 騎兵隊が駆けてくるような音響

声 「二億の騎兵隊よ・・・」

SE: 有り得ないような頭数の騎兵隊が駆ける音・・・と思われた轟音が、水の激流の轟音に変わる

(回想シーン) スローモーション? など、(映像を見た事のない人にとって) 幻のようなシーン。チベットの国旗がカラーではっきりと映る。(Z・I) 国旗の獅子の頭の辺りが、次のシーンの戦車に重なって映り込む。(回想シーン終わり)

戦車が砲弾を撃つシーン。天安門事件で、戦車が学生達や集まった人々を殺した事件。（テロップ：天安門事件一九八九年六月四日）

ヨ (N) 「彼らの口から出る火と煙と硫黄、この三つの災害によって、そこにいた人間の三分の一は殺されてしまった。馬（戦車）の力はその口と尾にある。尾はヘビに似ていて（長い砲筒）、それに頭があり（筒先が人々に照準を合わせる）、その頭で人に害を加えるのだ（砲を発射）。」

その事件で、殺されずに生き残った人々は、自分の手で造ったものが同胞を殺すようになっても悔い改めようとせず、また、悪しき習慣、偶像（天安門広場の毛沢東の肖像？）を礼賛してやめようとしなかった。また、殺人、風説、不品行や、盗みを悔い改めようとしなかった。

6. 舞台演技・場所は不明

（第十章）

もう一人の強い御使いが、雲に包まれて、天から降りてくる。髪の毛はキューティクルな虹色の輝き、顔は太陽のように輝き、足は火の柱のように眩しい（※おそらく、衣装から露出した肌が、光り輝いて眩しく見えるのだと思う）。彼は、開かれた小さな巻物を手に持っている。右足を海の上に、左足を地の上に踏み降ろし、獅子が吼えるように大声で叫んだ。

それに応えて、七つの雷がそれぞれ声を発した。

ヨハネ、その声を（羊皮紙に）書き留めようとする。

天からの声 「七つの雷の語ったことを封印せよ。それを書き留めるな。」

強い御使いは、天に向けて右手を上げ、天と地と海の中にあるあらゆるものを造り、世々限りなく生きておられる方を指して誓った、

強い御使い 「・・・もう時がない。第七の御使いが吹き鳴らすラッパの音がする時には、神が僕、預言者達にお告げになった通り、神の奥義は成就される。」

天 「さあ行って、海と地の上に立っている御使いの手に開かれている巻物を受け取りなさい。」

ヨハネ、強い御使いの所に行く。

ヨ 「その小さな巻物をください。」

強い 「取って食べてしまいなさい。それは、あなたの腹には苦いが、口には蜜のように甘い。」

ヨハネ、御使いの手から小さな巻物を受け取って食べてしまう。それは口には蜜のように甘かったが、それを飲み込んだら腹が苦くなった。

天 「あなたは、もう一度、多くの民族、国民、国語、王達について預言せねばならない。」

7. 別の聖所の舞台セット と スクリーンに映し出される映像

(第一章)

※ヨハネが小さな巻物を受け取りに行っている間に、舞台セットが変わっている。

御使いが、ヨハネに杖のような測り竿を渡す。

御使い 「さあ立って、そこの神の聖所と祭壇と、そこで礼拝している人々を測りなさい。」

チベットの寺院？（アジアの迫害された少数民族の都の聖所。）

ヨハネ、測って回る。

御使い 「聖所の外の庭はそのままにしておきなさい。測ってはならない。そこは異邦人に与えられた所だから。彼らは“四十二ヶ月”の間、この聖なる都を踏みにじるであろう。そして私は、私の二

人の証人に、荒布を着て、“千二百六十日の間”預言することを許そう。」

(テロップ：“四十二ヶ月の間”) (テロップ：“千二百六十日の間”)

国連の旗がはっきりと映る。(テロップ：国際連合旗＝北極を中心にした世界地図を、平和の象徴であるオリーブの枝葉で囲んだ図柄)

国連の旗の前に、二人の証人(チベットと東トルキスタンの人々)が訴え出ている。

ヨ(N) 「全地の主の御前に立っている二本のオリーブの木。そして二つの燭台である。もし、害を加えようとする者があれば、彼らの口から火が出て、」

常任理事国の権力者の命令で、近代的な兵器が火を出し、その敵を滅ぼす映像。(※国連の世界的な権威を示す映像)

ヨ(N) 「その敵を滅ぼすであろう。もし彼らに害を加えようとする者があれば、その者はこのように殺されねばならない。」

しかし、干ばつ、水が赤く汚染されるなど、何度でも災害や環境汚染が起こされる。(※国連が手を打たないということ)

(テロップ消える)

獣が、あの世の地獄から上ってくる。

日本でオウム真理教(＝カルト教団)と戦っていた人々が殺害される。(坂本弁護士一家殺害事件、刈谷さん拉致事件、等)

一九九五年に、日本の大都市で、テレビなどにオウム真理教の事件がずっと流れていた様子。十字架のイエスキリスト。

ヨ(N) 「いろいろな民族、部族、国語、国民に属する人々が、“三日半の間”、彼らの死体をながめるが、その死体を墓に納めることは

許さない。」（※世界中にテレビのニュースで事件のことが放送されたシーン）

数々の組織犯罪の証拠隠滅が上手く行っていた間、オウム真理教の人々は、喜び楽しみ（踊り？）、互いに贈り物をし合った（？）のだった。被害者達によって、彼らは悩まされてきたのだと（彼ら自身は犯罪組織なのに）、カルト集団特有の奇妙な妄想を持っていたからだ。

（テロップ：“三日半の後”）（※“三日半”は、事件が隠されてきた期間のこと）

神から命の息が出て、殺された被害者達の中に入り、（靈魂が）立ち上がった。それを見たオウム真理教の人々は、非常な恐怖に襲われた。

天からの大きな声 「ここに上ってきなさい。」

オウム真理教の人々が見ている前で、彼らは雲に乗って天に上った。

この時、阪神淡路大震災が起こる。（テロップ：一九九五年一月一七日 阪神淡路大震災）

ヨ(N) 「（画面上の）都の十分の一は倒れ、七千人が亡くなった。生き残った都の人々は動揺して、天の神に栄光を帰した。」（※この都の人々は、おおよそ敬虔であるという様子。）

ヨ(N) 「**第二のわざわいは、過ぎ去った。**（←テロップなどでこの文を強調）見よ、第三のわざわいがすぐに来る。」

第七の御使が、ラッパを吹き鳴らした。

大きな声々がざわざわと天に起こって言った、

声々 「この世の国は、

我らの主（しゅ）とキリストの国となった。

主は世々限りなく支配なさるであろう。」

座についていた二十四人の長老は、ひれ伏し、神を拝して言った、

長老

「今いまし、昔いませる、全能者にして主なる神よ。

大いなる御力をふるって支配なさったことを、感謝します。

諸国民は怒り狂いましたが、あなたも怒りをあらわされました。

そして、死人を裁き、あなたの僕なる預言者、聖徒、小さき者も、大いなる者も、

すべて御名を畏れる者たちに報いを与え、また、

地を滅ぼす者どもを滅ぼして下さる時がきました。」

天にある（幕屋の）神の聖所が開けて、その中に**契約の箱**が見えた。稲妻と、諸々の声（雷の轟き）と、雷鳴と、地震が起り、**大粒の雹**が降った。（SE：ピカッ、ゴロゴロ・・・ドオオオオ、ピシャーン！カカーッ、ゴゴゴゴ・・・ **ザアアア**・・・といった感じの音響）

8. 大きなスクリーンの映像

（第一二章）

[※天（上の方）から、大きなスクリーンが登場（等、映画館で本編が始まる時のような感じ）。]

太陽を着る女が、足の下に月を踏み（月が沈んで行き）、月と入れ替わりで登場。朝日が昇ったということなので、旭日旗か日の丸のデザインの衣装を着ている。頭に十二の星の冠をかぶっている。（※日本を擬人化したキャラクター）

女は子を宿しており、産みの苦しみと悩みのため、泣き叫んでいた。

[※実は、一昔前の特撮怪獣番組のようなシーン]

またもう一つの映像が天に現れ、赤い龍が登場。七つの頭と十の角があり、七つの冠をそれぞれの頭にかぶっていた。

龍は、尾で天にあった（映像上見渡す範囲の）三分の一の星を掃き寄せ、地に投げ落とした。

そして、子を産もうとしている女の前に立ち、生まれたなら、その子を食い尽くそうと待ち構えていた。

ヨ(N) 「女は男の子を生んだが、彼は鉄の杖を持ってすべての国民を治めるべき者であった。」

その男児は、神の御座のところに引き上げられた（天に召された）。

ヨ(N) 「女は荒野へ逃げて行った。そこには、”千二百六十日の間”、養われるように、神に用意された場所があった。」

(テロップ:” 千二百六十日の間”)

女は、荒野へ逃げて行く。

ヨ(N) 「さて、天では戦いが起こった。ミカエルとその御使い達が、龍と戦ったのだ。」

雷のような声で、両者の間で激しい論戦。[ミカエルと御使い達] VS [龍とその使い達]。

龍とその使い達が、論戦で負ける。天には彼らの居場所がなくなる。（←※龍達の甚大な不正が暴かれて、立場が怪しくなった）

解説 「この巨大な龍、悪魔とか、サタンとも呼ばれ、全世界を惑わす年を経たへビは、墮天し、その使い達も、もろとも墮落したのだ。」

龍と使い達が、もろとも舞台の地面に叩き付けられる。

ミカエル 「今や、我らの神の救いと力と国と、
神のキリストの権威は現れた。

我らの兄弟らを訴える者、
夜昼我らの神の御前で彼らを訴える者は、
投げ落された。
兄弟たちは、
小羊の血と彼らのあかしの言葉とによって、
彼に打ち勝ち、
死に至るまでもその命を惜しなかった。
それゆえに、天とその中に住む者たちよ、
大いに喜べ。
しかし、地上と海よ、
お前たちには災難である。
悪魔が、自分の時が短いを知り、
激しい怒りをもって、
お前たちの所に下ってきたのだから。」

龍は自分が墮天したと知ると、男児を生んだ女を追いかけた。そのとき、女に、大きな鷲の翼（アメリカの軍事的庇護）が与えられた。

ヨ(N) 「女は自分の場所である荒野に飛んで行き、そこでヘビから逃れて、”一年、二年、半年の間”、養われることになっていた。」

(テロップ：“一年+二年+半年の間” = “千二百六十日の間”)

ヘビは女の後ろから水を口から川のように吐き出して、女を押し流そうとした。津波や洪水（二〇一一年の東日本大震災による津波や、台風やゲリラ豪雨などによる洪水）が追ってくるが、地は口を開いてそれらの川のような水の流れを飲み干した。

(テロップ消える)

龍、逃げ切った女に怒りを発する。女の残りの子ら（＝この世にいる避難民達）に対して、戦いを挑むために出て行った。そして、海の砂の上に立った。

（第一三章）

[※特撮ものの怪獣番組のようなシーン、続き。怪獣の動作は大きさで不器用な感じ。怪獣を見ただけで人々は驚き恐怖するが、さらに怪獣たちは、龍からもらった不思議な力も使う。]

一匹の怪獣が海から上がってきた。角が十本、頭が七つ、角にはそれぞれ十の冠があり、頭には神を汚す名がついていた（テロップ、または、怪獣の頭の模様？）。豹に似ていて、足は熊の足のようで、口は獅子の口のよう。（←※特撮怪獣ものを見たことのない人の記述なので、それっぽいものということ）

龍は自分の力と位と大いなる権威を、怪獣に与えた。怪獣の頭の一つが致命傷を受けたが、治ってしまった。

（その映像上の）全地の人々は驚き恐れて、怪獣に従った。（龍の権威が怪獣に与えられたため、）人々は龍と怪獣を拝んだ。

人々 「誰がこの獣に匹敵できるだろうか。誰がこれと戦うことができようか。」

怪獣は、大言を吐き汚い言葉を語る、悪口屋。

解説 「獣には”四十二ヶ月の間”活動する権利が与えられた。」

（テロップ：“四十二ヶ月の間”）

怪獣は口を開いて、神と神の御名とその幕屋、すなわち天に住む者達を汚した。そして、怪獣は地上の避難民達に戦いを挑んで勝ち、さらに、すべての部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた。（※怪獣は、どんどん悪事を重ねるように仕向けられている） 怪獣が

逆らう人々を蹴散らし、人々を従わせ、拝ませるシーン。

解説

「地に住む者で、ほふられた小羊の命の書に、その名を世の初めから記されていない者は皆、この獣を拝むであろう。耳のある者は、聞くがよい。虜になるべき者は、虜になっていく。つるぎで殺す者は、自らもつるぎで殺されねばならない。そこに、聖徒たちは忍耐と信仰を余儀なくされてしまうのだ。」

二匹目の怪獣が地面から現れる。小羊のような角が二つあって、龍のように物を言う。一匹目の怪獣が持つすべての力を、一匹目の怪獣の目の前で働かせることができた。地上に住む人々に、致命的な傷が癒された一匹目の獣を拝ませた。また、軍事的パフォーマンスを行って、人々の前で、火を天から地に降らせるような兵器のデモンストレーションをして見せた。さらに、一匹目の怪獣の前で行うことを許された権威で、地に住む人々を惑わして、一匹目の獣の（肖）像を造ることを命じた。そして、その獣の（肖）像に息を吹き込むと、それが物を言うようになった。（※怪獣は、一匹目の怪獣を聖者と思いこませる不思議な技を使った）そこで、拝まない者（洗脳されない者）を皆、殺させた。そして、小さな者、大いなる者、富める者、貧しき者、自由人、奴隷、（貧富の差、社会的身分に関係なく）映像上の見渡す範囲に残ったすべての人々に、右手か額に刻印が押され[六百六十六]のテロップが付く。

怪獣が、テロップの付いてない店の人や買い物客らを追い払う等、街で意地悪をして回る。

ヨ(M)

「この刻印のない者は、皆、物を買うことも売ることもできないようにした。この刻印は、その獣の名、または、その名の数字のことである。ここに、知恵が必要である。思慮のある者は、獣の

数字を解くがよい。その数字とは、人間をさすものである。そして、その数字は六百六十六である。」

(※ 「666」の数字の刻印は、洗脳されて心からカルト集団・組織の思想を信奉している人々、すなわち、カルト関係者を映像上で指し示す数字のテロップ。)

(テロップ: ” 四十二ヶ月の間” 消える) [特撮怪獣もの、終了]

9. 聖所の舞台セット と 地上 (舞台セットか映像)

(第一四章)

小羊がシオンの山 (山・砦・町、または後に出てくる要塞) に立っていた。

十四万四千の人々が小羊と共にいて、その額に[小羊の名とその神の名]のテロップが付いた。(この印は、獣の刻印と対照的な印。)

天から、大水の轟きのような、激しい雷鳴のような声とする。その声は、豎琴の音のようにも聞こえてくる。

御座の前、四つの生き物と長老達の前で、小羊と十四万四千人が歌う。

M: 『新しい歌』

新しい歌は、地上から選ばれた十四万四千人以外に、誰も学ぶことができなかった。(※しかし、四つと長老達は第五章で歌っていたので、別の新しい歌か、もしくは、第五章の方はイントロのみか。)(※『新しい歌』の歌詞はカモフラージュされているので、演出上、創作言語等。天使語?)

十四万四千人は、天使のように純潔で無垢な人々だという様子。小羊の行く所ならどこへでもついて行く。これほどの大人数が規律を持って、編成を保ってどこまでも従っていく。

ヨ (N)	「彼らは、神と小羊とにささげられる初穂として、人間の中からあがなわれた者である。彼らの口には偽りがなく、傷のない者であった。」
	一人の御使いが中空を飛ぶ。地に住むあらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために、永遠の福音をたずさえてきて、大声で言った、
一人の御使い	「神を畏れ、神に栄光を帰せよ。神の裁きの時がきたからである。天と地と海と水の源とを造られた方を、伏し拝め。」
	第二の御使いが続いてきて、
第二	「倒れた、大いなるバビロンは倒れた。その不品行に対する激しい怒りのぶどう酒を、あらゆる国民に飲ませた者。」
	第三の御使いが続いてきて、大声で、
第三	「おおよそ、獣とその像とを拝み、額や手に刻印を受ける者は、神の怒りの杯に混ぜものなしに盛られた、神の激しい怒りのぶどう酒を飲み、聖なる御使たちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。その苦しみの煙は世々限りなく立ちのぼり、そして、獣とその像とを拝む者、また、誰でもその名の刻印を受けている者は、昼も夜も休みが得られない。ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ち続ける聖徒の忍耐がある。」
天からの声	「書き記せ、『今から後、主にあつて死ぬ死人は幸いである』。』」
御霊*	「その通り、彼らはその労苦を解かれて休み、そのわざは彼らについていく。」
	すると、白い雲があつて、その上に人の子のような者が座しており、頭に金の冠、手に鋭い鎌を持っていた。
	もう一人の御使いが聖所から出てきて、雲の上に座している者に向かって大声で、

御使い 「鎌を入れて刈り取りなさい。地上の穀物は全く実り、刈り取るべき時がきた。」

雲の上の者は、鎌を地に投げ入れた。地の穀物が刈り取られた。（※穀物は、地上から天に招かれる人々のこと。天に召された。）

また別のもう一人の御使いが、天の聖所から出てきた。彼も鋭い鎌を持っていた。さらに、火を支配する権威を持っている御使いが、祭壇から出てきて、前の御使いに向かって大声で、

火を司る御使い 「その鋭い鎌を地に入れて、地上のぶどうの房を刈り集めなさい。ぶどうの実がすでに熟しているから。」

それで、鎌を地に投げ入れ、地の葡萄を刈り集め、神の激しい怒りの大きな酒船に投げ込んだ。（※葡萄は、地上の聖徒達の魂の成長が実ったという表現）その酒船が都の外で踏まれた。赤い葡萄酒が酒船から流れ出て、馬の轡に届くほどになり、一千六百丁（二百九十六キロメートル）に渡って広がった。（※ここで作った葡萄酒で、この後、獣や邪悪な者達に裁きを与える。この葡萄は、エネルギー資源のようなものでもある。）

（第一五章）

ヨハネ、目を見張る。七人の御使いが、最後の七つの災害を携えていた。

ヨ (M) 「七人の御使いが携えた七つの災害で、神の激しい怒りが頂点に達するのだ。」

火の混じったガラスの海のようなスクリーンがあり、その傍に獣の試練に打ち勝った人々が、神の豎琴を手にして（歌う準備をして）立っていた。

M: モーセの歌、小羊の歌 （※「モーセの歌」は、モーセの神との対話や信仰体験、イスラエルの民の歴史・苦難・教義を歌にしたものらしい。「小羊の歌」も、そういったものになるはずだが、

内容は不明。イエス・キリストの歌なら、キリスト教のミサで歌われるような賛美歌か。)

人々

「全能者にして主なる神よ。

あなたのみわざは、

大いなる、驚くべきものであります。

万民の王よ、

あなたの道は正しく、かつ真実であります。

主よ、あなたを畏れず、

御名を褒め称えない者が、ありましようか。

あなただけが、聖なる方であり、

あらゆる国民はきて、あなたを伏し拝むでしょう。

あなたの正しい裁きが、

現れるに至ったからであります。」

天にある証しの幕屋の聖所が開かれ、そこから七つの災害を携えた七人の御使いが、汚れのない光り輝く亜麻布を身に着け、金の帯を胸に締めて出てきた。

四つの生き物の一つが、神の激しい怒りの満ちた七つの金の鉢を七人の御使いに渡した。

聖所は神の栄光と力から立ち上る煙で満たされ、七つの災害が終わるまで、誰も聖所に入ることができなくなった。(神と七人の御使いを残して、他の出演者は聖所から締め出された。)

(第一六章)

聖所から出た大きな声 「さあ行って、神の激しい怒りの七つの鉢を、地に傾けよ！」

第一の者が鉢を地(が映ったスクリーン)に傾けた。獣の刻印のテロップが付いている人々と、その(肖)像を拝む人々の身体に、酷い悪性のでき物ができた。

第二の者が鉢を海（が映ったスクリーン）に傾けた。海は血のように赤くなって、中の生き物が皆死んでしまった。（環境汚染によるものか、赤潮）

第三の者が鉢を川と水源（が映ったスクリーン）に傾けた。水が皆、血のように赤くなった。

水を司る御使い 「今いまし、昔いませる聖なる者よ。このようにお定めになったあなたは、正しい方であります。聖徒と預言者との血を流した者たちに、血をお飲ませになりましたが、それは当然のことです。」

祭壇（スピーカー） 「全能者にして主なる神よ。その通り、あなたの裁きは真実で、かつ正しい裁きであります。」

第四の者が鉢を太陽（が映ったスクリーン）に傾けた。太陽は人々を激しい炎熱で焼いた。強烈な日照りと猛暑。（獣のテロップの付いた）人々は、災害を支配する神の御名を汚し、悔い改めて神に栄光を帰することをしなかった。

第五の者が鉢を獣の座（が映ったスクリーン）に傾けた。獣の国は大気汚染で暗くなり、人々はマスクを装着し、その苦痛とでき物のために天の神を呪った。自分の行いを悔い改めなかった。

第六の者が鉢を大きな川（が映ったスクリーン）に傾けた。川の水は、日の出の方向から来る統治者・軍に対し道を備えるために枯れてしまった。

龍と獣と偽預言者の口から、蛙のような三つの汚れた霊が出てきた。それは惑わせようとする悪霊であって、全世界の各国の統治者のところに行き、彼らに召集をかけた。（悪霊は人の目には見えないものと思われる。）

ヨ(N) 「これらは惑わせようとする悪霊であって、全世界の王達のところに行き、彼らに召集をかけたが、それは全能なる神の大いなる日に戦いをするためであった。」

御座にいます方 (見よ、わたしは盗人のように来る。裸のままで歩かないように、また、裸の恥を見られないように、目をさまし着物を身に着けている者は、幸いである。)

ヨ(N) 「三つの霊は、ヘブル語でハルマゲドンという所に王達を召集した。」(※北朝鮮にハルマゲドンっぽい地名があるという話も聞くが、真偽不明)

第七の者が鉢を空中に傾けた。

御座にいます方 「事はすでに成った・・・！」

稲妻、諸々の声(轟く音)、雷鳴、そして、激しい地震が起こる。(SE: ピカッ、ゴロゴロ・・・ドオオオオ、ピシャーン!カカーーッ、ゴゴゴゴゴ・・・といった感じの音響)

ヨ(N) 「その地震は人間が地上に現れて以来かつてなかった程に、激しい地震であった。」

映像に映った獣の国の、大きな都は三つに裂かれ、諸国民の町々は倒れた。

ヨ(N) 「神は大いなるバビロンを思い起こし、この都に神の激しい怒りのぶどう酒の杯を与えられた。」

神は、神の激しい怒りの葡萄酒の杯を、この都に与えたのだった。

島々は皆移動し、山々は見えなくなった。

一タラント(約34キログラム)の重さくらいの大きな雹が、天から人々の上に降ってきた。人々は、この雹の災害のために神を呪った。雹の災害が非常に大きかったためだ。

(第一七章)

重要) 大淫婦は三キャラいる。

1. 赤い怪獣に乗った女。

2. 七つの山（経済大国）の上に座った女。 アメリカ金融界（ウォール街？）を擬人化したキャラ。

3. 水面の上に座った女。 旧天国にある万年億年都市を擬人化したキャラ。水面下（の地獄）からやがて上ってくる暗黒星雲に滅ぼされる。（有力者や商人のうちの避難民達は、船で難を逃れる。）

この三キャラのイメージが掛かっているので、舞台がかぶっている。三キャラとも、白（麻色/ややクリーム色か象牙色？）・紫・赤の衣装に、金や宝石や真珠で身を飾っている。

七つの鉢を持つ七人の御使いのうちの一人が来て、ヨハネに言った、

七人のうちの一人 「さあ、来なさい。多くの水の上に座っている大淫婦に対する裁きを見せよう。地上の王達はこの女と姦淫を行い、地上に住む人々はこの女の姦淫の葡萄酒に酔いしれている。」

ヨハネの身に何らかの不思議現象が起こり、七人のうちの一人がヨハネを荒野へ連れて行った。

10. 荒野 と 水の広がった舞台（または映像）

（水の広がった舞台または映像は、ここから第二章まで存在している）

（1. 獣に乗った女）

ヨハネは、そこで、一人の女が赤い獣に乗っているのを見た。

赤い獣は神を汚す数々の名で覆われ、七つの頭と十の角がある（赤い獣＝一匹目の怪獣）。

女は、紫と赤の衣を着て、金と宝石と真珠で身を飾り（アメリカの国旗のデザインに似るが微妙に異なる）、

憎むべき者と自分の姦淫の汚れで満ちている金の杯を手
に持ち、額に名のテロップが付いていた。

ヨ(M) 「女の名は、奥義であって、『(テロップ:) 大いなるバビロ
ン、淫婦どもと地上の憎むべき者たちの母』というのであった。
この女は、聖徒の血とイエスの証人の血に酔いしれていた。」

ヨハネ、非常に驚き怪しむ。

一人 「なぜそんなに驚くのか。 この女の奥義と、女を乗せている七
つの頭と十の角のある獣の奥義を、話してあげよう。

(テロップ: 昔=数億~十数億年前)

あなたの見た獣は、昔はいたが、今はおらず、そして、やがて
活動の極大期に達すると地獄から上ってきて、天国の住人達を攻
撃して侵食し、活動が収束すると、ついには滅びに至るものであ
る。地上に住む者のうち、世の初めから命の書に名を記されてい
ない若い者達は、この獣が、昔はいたが今はおらず、やがて来る
のを見て、驚き怪しむであろう。 初めてこれに遭遇するからで
ある。

(テロップ消える)

(2. 七つの山の女)

ここは、知恵が必要である。

七つの頭は、この女が座っている七つの山であり、

(赤い獣の七つの頭が、七つの山になり、七つの山は金融危機以前のアメリカを
含む経済大国七カ国。それに2.の女が座っている映像)

また、七人の王のことである。

(七つの山が、それぞれ七人の王に擬人化される、王とは国の統治者)

(テロップ: 二〇〇七~八年 金融危機発生の後)

そのうちの五人はすでに倒れ、

(七人のうち五人が倒れる)

一人は今おり、

(一人は無事。これはドイツか日本だと思うが・・・)

もう一人は、まだ来ていない。それが来れば、しばらくの間だけおることになっている。

(もう一人はまだ不在だが、来ればもうしばらく繁栄が続く) (※金融危機の時期、まだ発展途上国だったどこかの国が、やがて経済大国に)

昔はいたが今はいないという獣は、すなわち第八の勢力であるが、またそれは、かの七人の中の一人であって、ついには滅びに至るものである。

(獣は、七人とは別の所からやってくるが、金融危機の後の経済大国七カ国である、七人の中の一人である中国となり、最後には滅びに至る)

あなたの見た十の角は、十人の王のことであって、

(獣の十の角は、十人の有力者のこと) (※十人の有力者は国によって異なる)

彼らはまだ国を受けていないが、獣と共に、一時だけ王としての権威を受ける。

(十人は獣とつるんで、自分のいる国や世界の政治を動かす影響力を持つ)

彼ら十人は心をつにしている。そして、自分達の力と権威を獣に与える。

(十人は、獣に自分の権威を渡す)

彼らは小羊に戦いを挑んでくるが、小羊は、主の主、王の王であるから、それに打ち勝つ。また、小羊と心を共にしている者達も勝利を得る。」

([十人と獣 VS 小羊と仲間達]、小羊側が勝つ)

(2. に、3. 水面の女も映り込む)

一人

「淫婦の座っている水のような所は、あらゆる民族、群衆、国民、国語のことである。十の角と獣は、この淫婦を憎み、惨めにし、裸にし、肉を食い、すなわち、金融経済を火の車にして、焼き尽くすであろう。」

(2. 七つの山に座っている女キャラは、アメリカの都・ウォール街?の擬人化。

火で焼き尽くされる)

これらは神の計画であり、御言葉が成就する時まで、神が十の角に、彼らの支配権を獣に与える思いを持つようにされたのだ。あなたの見たかの女は、地上の王達を支配する大いなる都のことである。」

(第一八章)

もう一人の御使いが、大きな権威を持って、天から降りてくる。地上は彼の栄光によって明るくされた。力強い声で、

栄光の御使い 「倒れた、大いなるバビロンは倒れた！」

(2. より、3. 水面の女の方がメインに)

そして、あの世は悪魔、汚れた霊、憎むべき鳥の巣窟となった。地上のすべての国民が、神の激しい怒りの葡萄酒の裁きを知り、地上の王達が大いなる都と姦淫を行い、地上の商人達がかの都の極度の贅沢によって富を得た間のことである。」

天から出た声 「わたしの民よ。彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ。彼女の罪は積り積って天に達しており、神はその不義の行いを覚えておられる。彼女がしたとおりに彼女にし返し、その仕業に応じて二倍に報復をし、彼女が混ぜて入れた杯の中に、その倍の量を、入れてやれ。彼女が自ら高ぶり、贅沢を欲しいままにしたので、それに対して、同じほどの苦しみと悲しみを味あわせてやれ。

(2. と 3. から、1. がメインに)

彼女は心の中で、」

赤い獣に乗った女(1.) 『私は女王の位についている者であって、やもめではないのだから、悲しみを知らない』

天 「 と言っている。それゆえ、さまざまの災害が、死と悲しみと飢饉とが、一日のうちに彼女を襲い、そして、彼女は火で焼かれてしまう。彼女を裁く主なる神は、力強い方なのである。」

(1. 赤い獣の女、火で焼かれる)

(1. から 3. 水面の女がメインに)

彼女と姦淫を行い、贅沢を欲しいままにしていたその地の有力者たちは、彼女らが焼かれる火の煙を見て、彼女らのために胸を打って泣き悲しみ、彼女の苦しみに恐れをいだき、遠くに立って言う、

(3 水面の女、侵食されて、暗く変色していく。火で焼かれたわけではない。)

有力者達 『ああ、災いだ、大いなる都、不落の都、バビロンは、災いだ。おまえに対する裁きは、”一瞬”にしてきた。』

他の商人たちもその都のために泣き悲しむ。もはや、彼らの商品を買う者が、一人もないからである。(この都と住む世界を隔てたため、昔からの贅沢な顧客がいなくなった。) その商品は、金、銀、宝石、真珠、麻布、紫布、絹、緋布、各種の香木、各種の象牙細工、高価な木材、銅、鉄、大理石などの器、肉桂、香料、香、におい油、乳香、ぶどう酒、オリーブ油、麦粉、麦、牛、羊、馬、車、奴隸、そして人身などである。

天 「おまえの心の喜びであった果物はなくなり、あらゆる派手な、華やかな物はおまえから消え去った。それらのものはもはや見られない。」

これらの品々を売って、彼女から富を得た商人は、彼女の苦しみに恐れをいできて遠くに立ち、泣き悲しんで言う、

(3. 水面の女がメインで、2. 七つの山の女がやや映りこむ)

商人達 『ああ、災いだ、麻布と紫布と緋布をまとい、金や宝石や真珠で身を飾っていた大いなる都は、災いだ。これほどの富が、”一瞬”にして無に帰してしまうとは』。

すべての船長、航海者、水夫、すべて海で働いている人たち(=避難民達)は、遠くに立ち、彼女らが焼かれる火の煙を見て、叫んで言う、

避難民 『これほどの大いなる都は、どこにある。』

彼らは頭に塵をかぶり、泣き悲しんで叫ぶ、

避難民 『ああ、災いだ、この大いなる都は、災いだ。その驕りによっ
て、海に舟を持つすべての人が富を得ていたのに、この都も”一
瞬”にして無に帰してしまった。』

(3. 水面の女)

天 「天よ、聖徒たちよ、使徒たちよ、預言者たちよ。この都につい
て大いに喜べ。神は、あなた方のために、この都を裁かれたので
ある。」

一人の力強い御使が、大きなひきうすサイズの石を持ち
あげ、それを海のような水面に投げ込んで言った、

力強い御使い 「大いなる都バビロンは、このように激しく打ち倒され、そし
て、全く姿を消すのだ。」

(3. 水面に座った女=[あの世の万年億年都市・大いなる都バビロン]、水面下か
ら上ってきた暗い煙と暗いイナゴのようなものの大群に
襲われ、滅びていく。)

力強い 「おまえの中では、立琴をひく者、歌を歌う者、笛を吹く者、ラ
ッパを吹き鳴らす者の楽の音は全く聞かれず、あらゆる仕事の職
人たちも全く姿を消し、また、ひきうすの音も、全く聞かれな
い。また、おまえの中では、明かりも灯されず、花婿、花嫁の声
も聞かれぬ。これは、おまえの商人たちは地上で勢力を張る者
となり、すべての国民はおまえの流言で騙され、また、預言者や
聖徒の血、さらに、地上で殺されたすべての者の血が、この都で
計画され、流された報いだからである。」

11. 聖所の舞台セット

(第一九章)

天の大群衆が大声で唱えるような声が聞こえ、ヨハネは
そっちを見る（見に行く）。

天の大群衆	「(合唱) ハレルヤ、救と栄光と力とは、 我らの神のものであり、 その裁きは、真実で正しい。 神は、姦淫で地を汚した大淫婦を裁き、 神の僕たちの血の報復を 彼女になさったからである。」
声	「ハレルヤ、彼女が焼かれる火の煙は、世々限りなく立ちのぼる。」 二十四人の長老と四つの生き物とがひれ伏し、御座にいます神を拝して言った、
長老、四つ	「(祈り) アーメン、ハレルヤ。」
御座からの声	「すべての神の僕たちよ、神を畏れる者たちよ。 小さき者も大いなる者も、 共に、我らの神を讃美せよ。」
SE:	大群衆の声、多くの水の音、また激しい雷鳴のような怒濤の音が上がって盛り上がる
M:	祝宴やパーティーの雰囲気音楽が混じる
声	「ハレルヤ、全能者にして主なる我らの神は、 王なる支配者であられる。 私たちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。 小羊の婚姻の時がきて、 花嫁はその用意をしたからである。 彼女は、光り輝く、 汚れのない麻布の衣を着ることを許された。 この麻布の衣は、聖徒たちの正しい行いである。」

(※花嫁は、聖都のことで、“移動要塞都市”。空を飛んでくる。それは“模型”で、光り輝くベールで隠されていたのが、お披露目となる？ 小羊達が、それぞれの聖都の首長となる予定。)

御使いがヨハネに言った、

御使い 「書き記せ。小羊の婚宴に招かれた者は、幸いである。」 (※“婚宴”は、小羊の着任や聖都の出立のパーティーのこと)
「これらは、神の真実の言葉である。」

ヨハネ、御使いの足元にひれ伏して、拝そうとする。

御使い 「そのようなことをしてはいけない。私は、あなたと同じ僕仲間であり、またイエスの証人であるあなたの兄弟たちと同じ僕仲間である。ただ神だけを拝しなさい。イエスを証明するものは、預言を伝えた霊の存在と、その成就である。

終幕

(※ここから先は、イメージシーンがほとんど)

12. 幕間の活劇・昼

(第十九章)

天が開かれ、白い馬が登場。

? 「『忠実で真実なる者』よ・・・！」

白い馬の方 「我こそは、義によって悪しきを裁き、そして、義のために戦う者なり！ (かけ声：) とおりやあああ～・・・！ (等)」

SE: 馬が駆ける音 (パカラッパカラッ...)、等

ヨ 「目は燃える炎のようであり、多くの冠をかぶっていた。そして、彼以外には誰も知らない名が身に記されていた。彼は百戦錬磨・血染めの衣を纏い、その名は『神の言葉』と呼ばれた。」

天の軍勢が、純白の汚れのない麻布の衣を着て、白い馬に乗り、従った。彼らの口からは諸国民を打つため、鋭い言葉が紡がれるのだった。

白い馬の方は、鉄の杖を持って、諸国民を治める。そして全能者なる神の激しい怒りの酒船を踏む（裁きに使われた後の酒船?）。彼の着物にも、ももにも、「王の王、主の主」という名の文様が記されていた。

一人の御使いが太陽の中に立っていた。中空を飛んでいくすべての鳥に向かって大声で、

御使い 「さあ、神の大宴会に集まって来い！ そして、王たちの肉、將軍の肉、勇者の肉、馬の肉、馬に乗っている者の肉、また、すべての自由人と奴隷の肉、小さき者と大いなる者の肉を喰らえっ！」

すると、獣と（獣と縁を切れなかった）地上の有力者達とその軍勢が集まり、白い馬の方とその軍勢に戦いを挑んだ。

（チャンバラ活劇：[獣と地上の有力者 VS 白い馬の方とその軍勢]）

獣（小怪獣）は捕らえられ、偽預言者も、獣と共に捕らえられた。この両者（二者）は、生きながら、硫黄の燃えている火の池に投げ込まれた。それ以外の者達（獣にまだ従おうとする者達）は、白い馬の方の口から紡がれる鋭い言葉で斬り殺され（雷のような声でピシャーンと相手をたたき落とす、等々）、その肉を、すべての鳥が飽きるまで食べた（死骸が消えていく感じ）☆

（第二〇章）

一人の御使いが、地獄の鍵と大きな鎖を手を持って、天から降りてきた。

解説 「彼は、悪魔でありサタンである龍、すなわち、かの年を経たへびを捕えて千年の間つなぎおき、そして、底知れぬ所に投げ込み、入口を閉じてその上に封印し、千年の期間が終るまで、諸国

民を惑わすことがないようにしておいた。その後、しばらくの間だけ解放されることになっていた。」

13.

移動要塞都市内・裁判の場

数多くの座があり、裁きの権利がある人々がそれに座っていた。神に仕えたため首を切られた人々の霊（証言者たちの首から上の霊体）や、獣に打ち勝った人々の霊がいた。彼らは生き返って、キリスト（や彼らの首長ら）と共に、千年の間、聖都を統治した。

ヨ(N) 「神に仕えたために殺された人々の霊や、獣に打ち勝った人々の霊がいた。彼らは生き返って、キリストと共に、千年の間、聖都を統治した。」

ヨ(N) （それ以外の死人は、千年の期間が終るまで生き返らなかった。）

ヨ(N) 「これが第一の復活である。この第一の復活の資格にあずかる者は、幸いな者であり、また聖なる者である。この人達に対しては、第二の死はなんの力もない。彼らは神とキリストの祭司となり、キリストと共に千年の間、支配する。」（※この人達は、千年の間、任務中に命を落とすことがあっても復活できる。”災害時特殊任務”に就く人達）

14.

千年後・滅びた旧天国

(テロップ：千年後) サタン、獄から解放され、その地の四方にいる諸国民（姿はなく、海の砂や塵のよう）を惑わし、戦いのために召集する。海の砂のように多い、塵やエネルギー体の欠片の集まりが、広いところの上ってきて、空を飛んで帰還してきた聖都とその陣営を包囲した。

天から火が下ってきて、砂や塵のような姿になった者達を焼き尽くした。悪魔、サタンは、火と硫黄の池に投げ

込まれた。そこに、獣と偽預言者もいて、彼らは世々限りなく日夜、苦しめられるのである。

15.

大きな白い御座のある審判の場

大きな白い御座があって、そこにいます方が登場。それまでであった天も地もスクリーンも、その周囲からなくなって、跡形もなくなった。死者が、大いなる者も小さき者も共に、御座の前に立っていた。

ヨ(N)

「審判が執り行われることとなり、数々の書物が開かれたが、もう一つの書物が開かれた。これは命の書であった。死人はその仕業に応じ、この書物に書かれていることに従って、裁かれた。海はその中にいる死人を出し、死も黄泉の墓場（※あの世に古くからあった魂の墓場）もその中にいる死人を出し、そして、各々その行いと仕業に応じて、裁きを受けた。それから、死も黄泉の墓場も火の池に投げ込まれ消え去った。この火の池が第二の死である。この命の書に名が記されていない者は皆、火の池に投げ込まれた。」

解説

「死は消え去り、罪人は皆、火の池に投げ込まれ、世々限りなく永い期間、娑婆（しゃば）に復帰できなくなるのである。」

16.

聖所の舞台セット と 新しい天と地

(第二章)

新しい天と新しい地の舞台。先の審判の舞台は消え去り、海（水の広がった舞台）もなくなってしまった。

（※水の広がった舞台または映像があったここまでの間、避難行動の期間を表していた）

聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを出て、天から下って来た。

御座からの大きな声 「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、人の目から涙を全くぬぐいとって下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。**先のが、すでに過ぎ去った**からである（←テロップなどでこの文を強調）。」

(テロップ：**第三の災いが過ぎ去った**)

御座にいます方 「見よ、わたしはすべてのものを新たに作る。」「書きしるせ。これらの言葉は、信すべきであり、まことである。」

神はヨハネに仰せられた、

御座にいます方 「事はすでに成った。わたしは、アルパでありオメガである。初めであり終りである。渴いている者には、命の水の泉から価なしに飲ませよう。勝利を得る者は、これらのものを受け継ぐであろう。わたしは彼の神となり、彼はわたしの子となる。しかし、臆病な者、信じない者、忌むべき者、人殺し、姦淫を行う者、まじないをする者、偶像を拜む者、すべて偽りを言う者には、火と硫黄の燃えている池が、彼らの受けるべき報いである。これが第二の死である」」

七つの災害の七つの鉢を持っていた七人の御使の一人が来て、ヨハネに語って言った、

七人のうちの一人 「さあ、きなさい。小羊の妻なる花嫁を見せよう。」

17. 高い山 と 新しい天と地

一人は、何らかの不思議現象で、ヨハネを大きな高い山に連れて行った。聖都エルサレムが、神の御元を出て天から下って飛んで来る様子を見せてくれた。

都の様子： 都はエネルギーに満ちて高価な宝石のように輝き、透き通った碧玉（青色）のよう。大きな高い城壁に、十二の門、門それぞれに十二の御使いがおり、イスラエルの十二部族の名が門に書いてあった。東西南北それぞれに三つの門。城壁に十二の土台があり、それぞ

れに小羊の十二使徒の十二の名が書いてあった。(ヨハネは飛んできた都を下から見上げていたので、城壁の下部や、土台の様子がよく見えた。)

ヨハネと一人、着陸した聖都の所に移動。(←どうやって移動したのかは不明。)

注) これは、実は、聖都の模型。

一人は金の測り竿を持っていて、都と門と城壁を測った。

ヨ (M) 「都は立方体で、長さ・幅・高さはいずれも同じで一万二千丁。城壁の高さは百四十四キュビト。これは人間の・・・いや、御使いの尺度である。」

(テロップ：都の長さ・幅・高さ＝一万二千丁＝2220キロメートル 城壁の高さ＝百四十四キュビト＝63.9メートル)

ヨ (M) 「城壁は碧玉で築かれ、都はすきとおったガラスのような純金で造られていた。」

城壁は水を溜める水槽の役割のため、青色のプール。都は立方体型の模型であり、「透き通ったガラスのような純金」の色のモザイクが掛かっている。

ヨ (M) 「都の城壁の土台は、さまざまな宝石で飾られていた。」

第一の土台は碧玉、第二はサファイヤ、第三はめのう、第四は緑玉、第五は縞めのう、第六は赤めのう、第七はかんらん石、第八は緑柱石、第九は黄玉石、第十はひすい、第十一は青玉、第十二は紫水晶であった。

ヨ (M) 「十二の門は十二の真珠であり、門はそれぞれ一つの真珠で造られ、都の大通りは、「透き通ったガラスのような純金」であった。」

十二の門は球体で、実は除塵槽。災害の塵や砂のようなものを取り除く。都の大通りにも、モザイクが掛かっている。

ヨハネ、都の中を見て回る。

ヨ (M) 「わたしは、この都の中には聖所を見なかった。 全能者にして主なる神と小羊が、その聖所なのである。

(聖所の舞台セットはなくなっている。)

都は、日や月が照らす必要がない。神の栄光がこれを明るくし、小羊が都の明かりだからである。

(都は宇宙空間を飛ぶため、いつも誰かが起きていて、夜でも明るい。)

諸国民は都の光の中を歩き、地の王たちは、自分たちの光栄をそこに携えて来る。

(都が着陸している所で、そこを人々が行き交っている様子。)

都の門は、終日、閉ざされることはない。そこには夜がないからである。人々は、諸国民の光栄と誉れをそこに携えて来る。

(御使いが門番をしていて、都に入れる者を制限している。)

しかし、汚れた者や、忌むべきこと及び偽りを行う者は、その中に決して入れない。入れる者は、小羊の命の書に名を記されている者だけである。」

(第二章)

ヨ (M) 「御使いはまた、水晶のように輝いている命の川の水を見せてくれた。」

一人は、命の水の川をヨハネに見せた。川は水晶のように輝いている。聖所の舞台セットはなくなったが、神の御座と小羊の御座はあり、そこから川が始まって、都の大通りの中央を流れている。(都には、除塵槽や水を溜める城壁など、水を使った仕掛けがあるので、川の流れを印象的に。)川の両側に命の木がある。

ヨ (M) 「命の木は、十二種の実を結び、毎月実り、木の葉は諸国民を癒す。呪われるべきものは、もはや何一つない。神と小羊との御座は都の中にあり、その僕たちは彼を礼拝し、御顔を仰ぎ見るのである。」

住人達の額には、御名が記されている。(←[神の印]と同一か、または、彼ら一人一人の新しい名。)

ヨ(M) 「夜は、もはやない。あかりも太陽の光も、いらぬ。主なる神が彼らを照らし、そして、彼らは世々限りなく支配する。」

18.

場所不明

↓※この先は、誰がセリフを言っているか分からない。工夫してOK。↓

彼 「(ヨハネに対して) これらの言葉は信ずべきであり、まことである。預言者たちの魂の神なる主(しゅ)は、すぐにも起るべきことをその僕たちに示そうとして、御使を遣わされたのである。見よ、私は、すぐに来る。この書の預言の言葉を守る者は、幸いである。」

ヨ(M) 「これらのことを見聞きした者は、このヨハネである。私が見聞きした時、それらのことを示してくれた御使の足元にひれ伏して拝そうとすると、彼は言った、」

彼 「そのようなことをしてはいけない。私は、あなたや、あなたの兄弟である預言者たちや、この書の言葉を守る者たちと、同じ僕仲間である。ただ神だけを拝しなさい。」

また――がヨハネに言った、

―― 「この書の預言の言葉を封じてはならない。時が近づいているからである。不義な者はさらに不義を行い、汚れた者はさらに汚れたことを行い、義なる者はさらに義を行い、聖なる者はさらに聖なることを行うまにさせよ。」

イエスキリスト(最初に語り始めた者) 「見よ、わたしはすぐに来る。報いを携えてきて、それぞれの仕業に応じて報いよう。わたしはアルパであり、オメガである。最初の者であり、最後の者である。初めであり、終りである。命の木にあずかる特権を与えられ、また門を通過して都に入るために、自分の着物を洗う者たちは、幸いである。犬ども、まじないをする者、姦淫を行う者、人殺し、偶像を拝む者、また、偽りを好みかつこれを行う者はみな、外に出され

ている。 わたしイエスは、使をつかわして、諸教会のために、これらのことをあなたがたに証した。わたしは、ダビデの若枝また子孫であり、輝く明けの明星である。」

御霊も花嫁も共に言った、

御霊*、花嫁（聖都？） 「きたりませ。」

？ 「聞く者も、『きたりませ』と言いなさい。」

？ 「渴いている者はここに来るがよい。命の水が欲しい者は、価なしにこれを受けるがよい。」

ヨ 「この書の預言の言葉を聞くすべての人々に対して、わたしは警告する。もしこれに書き加える者があれば、神はその人に、この書に書かれている災害を加えられる。また、もしこの預言の書の言葉をとり除く者があれば、神はその人の受け取るべき分を、この書に書かれている命の木と聖なる都から、とり除かれる。」

これらのことを証しする方 「その通り、私はすぐに来る。」

一同 「（祈り）アーメン、主イエスよ、きたりませ。」

ヨ 「（祈り）主イエスの恵みが、一同の者と共にあるように。」

（終わり）

参）*御霊（みたま）とは： キリスト教では“聖霊”という考え方がある。“最初、それは舌のような形をしていた”とか色々諸説があり、おそらく、それそのものは実写化が困難なもの。セリフが響くのみにするなど。または、新約聖書に“御霊が鳩のようにイエスの上に下った”などの記述があるように、**鳩の姿**で仮に表象されることがある。“死者の霊”とは明確に異なる点に注意。

参） 黙示録の原文のセリフは、避難計画であることをカモフラージュする必要があったため、全体を通して、そのセリフだけでは意味がはっきりしないようになっています。また、誰が言ったセリフか判然としない箇所が多々あります。セリフは、**視聴者に伝わりやすいように**、工夫していいでしょう。

参） 聖書の原文で分かりにくいと思った記述は、作者が解釈した内容に変えています。解釈が怪しいと思ったら、**日本語訳の場合、「新約聖書 口語訳」**で確認して下さい。ネット上にも全文あるようです。「現代語訳」は、誤翻訳と言われるくらい、端折りがちの文章らしいので注意☆

*WORDテンプレートは、以下のサイトからお借りしました。

→「映画用脚本・シナリオ・ワード・テンプレート」株式会社DEERSTUDIO
<http://deerstudio.jp/inc/downloads/film-and-video/script-microsoft-word-template.html>